
しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい

【ZPDF】

Z1280M

【作者名】

【あらすじ】

苦しい

苦しい

苦しい

苦しい

苦しい

苦しい

苦しい

苦しい

#二〇二

彼は小学3年生の頃に、いじめが原因で不登校になりました。

母親は彼を甘やかせますが、父親は厳格であるもとの子供の事には無関心で面倒事は全て妻に任せるというものでした。それにより彼は自宅学習という特例措置を受けて学校へ通うことなく義務教育を終えます。

ですか、彼には学習障害という障害がありました。学習障害は当時としては認知されていない類の物で彼自身も、また誰一人として、その障害に気付きませんでした。

この障害は、その名の通り学習するのが困難な体質であり障害なのですが、彼は成長するに従つて障害がより強いものへとなっていました。

彼は母に愛されていると思つていました。

また母も彼を愛していました

ですが母の愛は強すぎました。

母は彼が学習障害である事に気付かず皆に遅れを取らない様に必死で勉強を教え込もうとします。

その甲斐があつて彼の学力は同世代のそれと比べて高いのですが、時間が経る毎に障害が悪化し、新しい事が覚えられなくなつていきました。

学力は同年代の子らに、いつの間にか追い越されて彼自身も母親もその事に絶望しました。

ですが母は彼に、その絶望する自分の姿を一切見せませんでした。

外の世界と一切の交流が経たれて約3年が経ちました。

学校へ通えば中学1年となる時期になりました。

この頃から父親が彼に関心を示し始め学校を行かせる様に手続きを

始めました。

理由は初対面からならば新たな友達が出来て、集団の輪に一から入る必要も無いと感じたからです。

しかし、上手くはいきませんでした。

彼は自分を周囲と比べる事により劣等感を感じる様になりました。それにより不登校児へと戻るのですが、父親はそれを談じて許しました。

彼は学校で友人も作れて、それなりの形で社会に溶け込めていたので、今、その道から逸れるのは悪い事であり逃げと判断したのです。彼も母もそれが正しいと思い同意しました。

しかし、父親は仕事柄、朝家にはいません。

彼が朝、必死で学校を休みたいと母親に懇願すれば願いは叶います。学校の理解できない勉強よりもマイペースで勉強した方が身になると判断した母親は、彼の言いなりになりました。

しかし、頑張つても学力が身に付きません。

あの手この手で試行錯誤しましたが母親も疲れ果てストレスがたまり諦めました。

学力の無い不出来な子として認め学校に行かせようとします。

母としては学力が無くとも社会適応できればどうにかなると考えるに至ったのです。

でも、彼は自分を不出来な子として認めたくなかった。

散々、努力して勉強したのに身に付かないのは、彼が一番気にしていたからです。

プライドと自尊心がズタズタの状態で彼は登校するのだけれど、勉強しか知らない彼は友人とは何も話題が合わない事を知りました。何を言葉にしても自分から気を使うばかりで、何処にも居場所がありません。

周囲の楽しそうな友人の輪を見る度に羨ましく思うも、どんなに頑

張つてみても、そのらしい関係が作れないのです。

その苦痛に耐えかねて彼の不登校がまた始まります。

泣きすがる彼を母親は甘やかせますが、同時に子供の将来に対しての不安を募らせていました。

その不安を母は父に相談をしました。

父親は彼と話をしました。

どうして学校へ行きたくないのかを聞き、なぜ行くべきかをどんな話しました。

でも彼は自分の学校での苦痛を言葉に出来なかつた。

勉強も駄目で人間関係も駄目等という親不孝で否定的な現実をどうしても認めたくないで親に話せなかつた。

彼は泣くばかりで会話の無い状況が続き父親を激怒させます。

その日の彼は説教をされて眠りにつきました。

翌朝、父親は無理やり彼を学校へと行かせようと引っ張り出そうしました。

しかし、彼はそれに断固抵抗します。

モノに対してハツ当たりをしました。

彼は、そんな事しかできない自分が余計に情けなくて、情けない自分を両親に見られているのが悔しくて、でも、そんな自分を認めるのに納得できい。

彼は自分を同処理して良いか判りませんでした。

パニックになりハツ当たりをする度に、今の自分の状況を受け入れられずに、パニックがエスカレートします。

その結果、ハツ当たりもエスカレートして、ハツ当たりがエスカレートする度に更にパニックに拍車を駆けます。

テーブルの食器はグチャグチャに散乱して、その姿を両親は呆然と見ていました。

日頃大人しい彼からは、想像も付かない光景だったのでしょうか。

その暴れる彼を止めようと母親が力ずくで抑えようとした。

その拍子に彼は母親を突き飛ばしました。

母は氣絶しているのか動きません。

彼は、自分のした結果を目の当たりにした瞬間に自分を殺そうと決意しました。

台所の包丁を手に取り死のうと試みたのですが、父が止めに入りみもみあいになりました。そして父親も突き飛ばしました。

その拍子に父も母と同じように氣絶しました。

唯一違ったのは、父親の腹部に包丁が刺さっていた事です。彼は包丁を抜き取った後に、父を殺したのを自覚しました。母は、まだ、生きているかも知れないと思う彼は、それでも自分が父親を殺したという最悪な事実だけは母に知られたくないかった。彼は母親にこの不幸の現実を知らずに居て欲しい。

そう思い彼は母を殺しました。

彼は何度刺したか判らない程刺した。

刺せば刺すほど自分が何をしているのか判らなくなつてパニックを起こす彼は、

死の基準が何処にあるのか判らなくて、泣きながら何度も刺したのです。

彼はその後、自分で自殺を図りましたが、どうしても死ねなかつた。

逃げる様に家を飛び出し、日が暮れた。

行く当ても無く結局、家に帰ると、そこで警察に逮捕された。

通報したのは父親だつた。

父は氣絶していただけで、重症であつたものの一命は免れていたのです。

彼が親を殺したその時、13歳。少年法と障害が考慮されて罪は軽

く、5年で少年院から出所した。

彼は父親と会つて話をしました。

自分がなぜ、こんな酷い事ができたのかを話した彼は父に受け入れられた。

全てを受け入れられ、それでも許してくれる父の存在は彼にとって大きくて、だけど、それ以上に自分のしでかした行為に罪を感じた。父親の愛を感じれば感じる程に、母を殺した事を自覚せざる終えない訳で、その苦しみから逃れる為に、何度も自殺未遂をした。けれど、その都度、父が止めに入り彼は生きていた。

父は何度も言いました。

「お前が生きているだけでいい。」と……

ある日、彼は自己分析をしている内に、この小説みたいな話を書いてしまった。

そして

「小説家になろう」に来て出来心で、この話の一節を投稿しました。

すると絶賛する読者が一人現れ、その人と友達になりました。

彼はその人の事が好きで、その人の小説を読む内に次第に自分も小說らしいものを書きたいと願うようになった。

彼は沢山の小説を読み書き、日々を現実逃避していたら、沢山の友達ができてしましました。

友達と付き合う内、自分が必要とされている事を感じた彼は、自分の立場を思い出しました。
『好かれる様な人間じゃない』『人を好きになつて良い人間じゃない』と……

それからというもの、友人と交流する度、親を殺した時の恐怖と罪悪感が蘇つてしましました。

その苦しみに耐えられなくなつた彼は自問自答を繰り返した。

その結果『嫌われたい』『恨まれたい』その方がきっと楽であると、そう考える様になりました。

そして、彼は人に忌み嫌われる様な愚かな行為を始めた。

だけど、彼の優しさを既に知つてしまつた者には全く通用しなかつた。

ある程度は彼らと離れる事ができたけれど、彼自信は人が好きで必要としていた。

現実世界で友達が居なかつた彼にとつては、ココは憩いの場であつて、

どうしてもココに来て、つい皆を見てしまつ。

その都度苦しみを思い出してしまつ彼は逃げた。

誰とも交流を交わすことなく逃げ続けた。

でも、駄目だつた。

思い出を消す事は彼には無理だつたのです。。
つらそうな人を見てしまつと、つい、励ましたくなつて声を掛けてしまつ。

しかし、その都度嫌な記憶が蘇る。

彼は思いました。

『せめて、誰かを傷付けずに恨まれる術があつたなら、自分が必要とされるなんて思わない。そしたら少しは苦しまなく済んだのに…』

…』

そう思つた彼は最後に友人に聞いた。

『誰かを傷つけずに恨まれる方法つてないのかな？』
でも、そんな方法は、ありはしなかつた。

嫌な記憶を思い出し自殺未遂を繰り返そつとしてしまう彼は、その都度、父を困らせます。

その都度、2人は苦しくて苦しくて……でも、ようやく晴れた。

彼の父親は病氣で死んでしまいました。

残された彼の自殺を止める者が誰も居ません。

これ以上苦しまなくて良いと理解した彼は父の後を負う様に自殺へと向かいます。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1280m/>

苦しい

2010年10月15日23時53分発行